

因果理論は介入を放棄すべきか—介入主義の意味論的問題

清水 雄也（本学社会学研究科博士後期課程）

本発表は、介入主義的因果理論に対して近年なされた或る批判を取り上げ、その議論の帰結と妥当性を検討するというものであった。以下、発表の概要と質疑応答についてまとめる。

因果性とはいかなるものか。この古くからの問題が、今日、科学哲学の文脈において再び盛んに論じられている。そして、その中で標準説とされているものの1つに、James Woodward が提唱する介入主義的因果理論がある。介入主義は、因果性を介入という道具立てによって意味論的に解明しようとする立場であり、その基本的な着想は次のようなものである。すなわち、「 Y を変化させるような X への可能な介入が存在するとき、かつそのときに限り、 X は Y の原因である」。

この介入主義に対して、Alexander Reutlinger は或る重大な修正を迫っている。それは、介入主義の核心たる介入を放棄せよというものである。上述のように、介入主義は可能な介入というアイディアに訴えているが、その可能性がどのような種類のものであるかということが問題となる。Woodward の理論は、介入を人間による実行可能性から切り離し、要求を原理的な可能性にまで弱めることを重要な特徴としている。さらに、Woodward は、この原理的な可能性なるものが物理的可能性ではなく、それよりもさらに弱いものであることをすでに認めている。このことから、Reutlinger は介入主義が要求する可能性とは論理的可能性に他ならないと見定め、それを介入の様相的特徴と呼ぶ。そして、この様相的特徴のために、介入は因果理論から除去されるべきものになっていると論じる。

Reutlinger は2つの議論を提示する。第1の議論は、Woodward の理論において介入は実質的な役割を果たしておらず、介入を含めるのは余計だというものである。第2の議論は、介入を不可欠なものだと考えると、そこから帰結する因果理論は不適切な理論にならざるを得ないというものである。

この議論には問題点がある。まず、Woodward が理論的に要請する介入の可能性が本当に論理的可能性なのか明瞭ではないし、仮に Woodward が様相的特徴を認めたとしても、介入主義を別種の可能性によって再構成できる見込みは依然として残る。また、介入が因果理論を不適切なものにするという議論は、反事実的条件法の標準的意味論において物理法則が担う役割を過剰に評価するものであり、これは意味論を適切に調整することで回避できるように思われる。このように、Reutlinger による批判は介入を放棄すべき一見の理由を与えるのみにとどまっており、介入を放棄すべきだという決定的な議論にはなっていない。本発表で指摘した点を含め、今後さらに徹底した検討がなされるべきである。

最後に、会場から頂戴した質問のうち2つのものについて報告したい。1つめは、「介入主義は無限後退を招くのではないか」というもので、これに対しては、介入主義の意味論的議論において悪性の循環や無限後退は発生していないと答えた。2つめは、「介入主義は形而上学的にはどのような種類の因果性を扱うのか」というもので、これについては、介入主義は因果の形而上学的分類について特定のコミットメントを伴わないと答えた。この他、多くの有意義な質問やコメントが寄せられ、今後の課題や議論のポイントがより明確化された。